



プロパガンダ・ラジオ

渡辺 考著

(筑摩書房・2484円)

NHKのスタッフが米国立公文書館で「ラジオ・トウキョウ」の130巻程度の録音テープを発見したのは2009年のこと。太平洋戦争下、このラジオ国際放送は、英語・日本語でニュースや政策・国策のスピーチ連発軍捕虜向けのプロパガンダとして連合軍捕虜を使っての日本軍費美を伝えた。米側はこの謀略放送を傍受し保存していたのである。

本書は、この戦時海外向け放送の資料を発掘し、関わった人々を日本の内外に訪ね歩きまとめている。当時の関係者は少なくなっているが、その子、時には孫にも会って証言を求めている。その点で丹念なノンフィクションでもあり、いまだ知られざるエピソードなども紹介されている。

短波を使ったラジオ国際放送は、1935年から始まったのをみて、つまりは戦争に利用される運命だった。特にドイツのナチス政権がラジオを効果的に用いていたに倣って、日本でも情報統制機関をつくり、戦時の謀略の「武器」として

謀略の武器の歴史検証

く。本書はその経緯を具体的に描いているので、戦時ラジオ史としても貴重な意味を持つ。それについても日本の情報戦は、どうしてこれほどまでに虚偽、誇大を恐れず、事実をすり替えたのだろうか。例えば、ガダルカナル島の戦いで「ブアタルカナルの米兵よ、聴け。諸君等は今や完全に米本土は勿論、臺灣からも隔離されてブアタルカナル島に孤立せしめられた」と放送したが、事実は全く逆であった。当時アナウンス原稿を書いたスタッフは「被害はつねに少なく、戦果はつねに大きかった」と告白している。

わたなべ・こう 1966年東京都生まれ、NHKディレクター。



誰が星の王子さまを殺したのか

安富 歩著

(明石書店・2160円)

本書は「星の王子さま」の謎を鮮やかに解き明かす。第2次世界大戦中、サンテグジュペリがナチスから逃れて米国に亡命し、アフリカへ志願出征する直前に発表された「星の王子さま」は、政治的な意味も含め、さまざまな解釈を生んできた。しかし、謎めいた登場人物はなかなかその「真のメッセージ」を明らかにしてはくれない。

本書ではこれまで以上に掘り下げられた解釈を覆すような議論を展開する。小さな手がかりを糸口に切り込んでゆくその手法は見事というほかない。

「モラル・ハラスメント」とは、一見無害な「ミニニケーション」を装って人の心を支配し、かつその苦しみは自身のせいだと誤信させる精神的暴力。それは夫婦や恋人、親子、友関係、会社や国家と個人の間に多岐に及び、人間の魂を奪う。ハラスメントにさらわれたとき、人間は自らの魂の主人であることもやめてしまふ。そしてその苦しみを自由でいかに取り違える。王子の苦

死への謎鮮やかに解く

悩は「なにがある」といふ。秀逸なのは「飼いなす」という言葉に込められたトリックを明らかにした点である。気難しいハラに振り回される王子。本来はハラが王子の心を支配し、飼いなしたにもかかわらず、キッネは王子がハラを飼いなしたと「飼いなす」というものに対して責任がある」と王子を追いつめる。

やすとみ・あゆむ 1963年大阪府生まれ、東大教授。

(深尾葉子・大阪大准教授)

Minami no Hondana



「倍返しだ」の流行語を生んだテレビドラマ「半沢直樹」は、テレビ史に残る大ヒットとなった。この原作シリーズの第4弾が本書。大手都銀の行員・半沢直樹は今回、国家権力を相手にした闘いに臨む。

「銀翼のイカロス」 池井戸 潤著 (ダイヤモンド社・1620円)

東京中央銀行営業第2部次長の半沢は、中野渡頭取の指名で、経営危機に陥っている帝國航空を担当することになる。本来の所管の審査部が、業績悪化に歯止めをかけることができず、担当を振り替えられたのだ。審査部が妥当と判断していた当初の再建計画は、

国家権力に「倍返しだ！」

いかにも甘いものだった。政治家の暗部に触れて半沢は峻烈な姿勢で再建を目指す。だが政権交代、地位とメンツ、ブラによって国土交通相に就任を懸けた対決シーンのした元人気女子アナの白井は、敵しい言葉のやり取りは、前政権時の再建プラン、敗者は顔色を失い、唇を白紙撤回し、私的に検討。勝者は必要とチーム「再生タスクフォース」を結成、リーダーとな。そして油断した方がつた弁護士の方原は「スビ」。



弱者の戦略

稲垣 栄洋著

(新潮選書・1188円)

郷土発おすすめ

自然界に生きる動物には、強者が生き残り弱者は滅ぶ、というおきてがある。しかし現実にはマウンテンやナメクジなども生きてくる。そんな一見弱々な彼らの生き方を解き明かしたのが本書である。虫けらやタンポポの知恵が人間の役に立つものか。その思ひは強い人である。激しい競争社会に生きる人間にも弱い人だっている。だからこそ、「弱さを武器に自然界をいかに生き抜いている昆虫や植物に学ぶことが多く、と著者は力説する。本書は全8章で、それぞれ「弱者大戦略」について動物植物がどうしているのか、「強者の力を利用する」など、ビジネス書に出できそうなタイトル。動物や魚類の生存競争が、「生き残るための戦略」という切り口で数多く紹介されている。

「自然に生きる動物には、強者が生き残り弱者は滅ぶ、というおきてがある。しかし現実にはマウンテンやナメクジなども生きてくる。そんな一見弱々な彼らの生き方を解き明かしたのが本書である。虫けらやタンポポの知恵が人間の役に立つものか。その思ひは強い人である。激しい競争社会に生きる人間にも弱い人だっている。だからこそ、「弱さを武器に自然界をいかに生き抜いている昆虫や植物に学ぶことが多く、と著者は力説する。本書は全8章で、それぞれ「弱者大戦略」について動物植物がどうしているのか、「強者の力を利用する」など、ビジネス書に出できそうなタイトル。動物や魚類の生存競争が、「生き残るための戦略」という切り口で数多く紹介されている。

生物界に学ぶしごとさ

たどるとは生き物の「強さ」について、ライオンに食われるシマウマはなげきながら、食物連鎖のピラミッド図が教えてくれる。強さとは生き残ることである。一方で、「食われる者の食われない戦略」の章では、群れる、逃げる、隠れる。さらすなど、子孫を残すために競争を避ける工夫が登場する。一方、小さな武器にして「ニッチ」(生態的地位)を探し求め、場所や時間をずらして自分の居場所を見つけたのが95万種も存在する昆虫。彼らはオンリーワンの「勝者」であり、ここでは人間社会にも通用しそうな戦略が発見されて面白い。最後に万物の霊長・人間が登場。人類の祖先は弱者だったからこそエラ、困難を乗り越え進化を遂げてきた。ゆえに強化する者が生き残り、弱者は弱くなる。その目的は常に弱立場の人に向けられており、「強く生きよ」とのエールを紙背に感じた。(杉山武子・文芸誌「火の鳥」同人)

いながき・ひでひろ 1968年静岡県生まれ、静岡大学大学院農学研究所教授。